

## よさみつけをしベルアップさせるために



生徒たちが取り組んでいる「よいことみつけ」ですが、同じことを平安時代の『枕草子』の中にもみつけることができます。ただ、「仲間についてのよさ」と、「四季についてのよさ」という違いはありますけどね。

作者清少納言は、第一段（冒頭）に春夏秋冬のすばらしいところを書いていきます。（冬についてだけ、一部分「わろし」と書いていますが。）そこから清少納言のものの見方や考え方を知ることができます。

例えば春。清少納言はあけぼの（夜明け）がよいと言っています。つまり、彼女は夜明けを見るために目を覚ましているのです。夜明けから夜までの景色や様子を、鋭く見ているのが清少納言です。

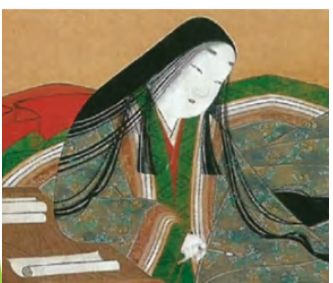
私たちはどうでしょう。忙しい毎日に追われているがために、見ている時間は限られていますよね。夜明け頃は、まだ夢の中という人も多いのではないのでしょうか。清少納言の見方をまねて、自分が見ようとしていない時の仲間の様子に気付けると、よさがもっともっと見つかるかもしれませんよ。

次に冬。清少納言はつとめて（早朝）がよいと言っています。早朝は最も冷えこむ時。現代人なら、ほとんどの人が敬遠する時間帯ですよ。自分にとって都合がよいか悪いかで判断していかないのが清少納言です。

私たちはどうでしょう。多くの判断が「自分にとって」や「集団にとって」になっているのではないのでしょうか。役に立ったとか、自分（たち）にプラスになったという判断だけではなく、その仲間の人間性と関わらせてよさが見つけれらるとよいですね。

例えば、「Aさんは生活委員としてがんばっているからよかった」ではなく、「Aさんは整理整頓に対する意識が人一倍高く、それが下校時の教室の見届けにつながっている」とすれば、「よかった」と書かなくても、仲間にAさんのよさは伝わりますね。その仲間のよさをあなたの言葉ではっきりさせると、よさみつけがレベルアップするかもしれませんよ。

『枕草子』を読むと、ただ単によいところが挙げられているだけと思いがちですが、それは違います。清少納言の感覚の鋭さ、打算ではなく感動を大切に生き方は、現代人もぜひとも見習いたいものです。あなたは、「令和の清少納言」になれるかな。



（九月一日 記）